

# 同志社大学

## 2013年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2014年 2月 22日提出

所 属	職 名	氏 名
経済学部	教授	清川 義友
研 究 題 目	マクロ経済政策研究	
研 究 成 果 の 概 要	<p>昨年度の研究ではテイラー・ルールに代表される利子率政策を対象として、金融政策の効果を研究してきたが、今年度はその枠組みを少し広げ、もう一つの金融政策ルールであるマッカラム・ルール、すなわちベース・マネーを対象とする政策ルールとの比較研究を行った。まだ始めたばかりであるため、すぐに明確な結果が出たわけではないが、次にあげるようないくつかの点が明らかになってきた。</p> <p>まず、どちらのルールがより望ましい結果を経済にもたらすかを検討する際に用いるマクロ・モデルについて、よく用いられるのは合理的期待を利用した「フォワード・ルッキング」モデル、すなわち現在の経済変数が将来の予想される経済変数と現在から将来にわたるショックに依存するようなモデルだが、インフレーションの慣性を考慮すると、むしろ従来から用いられてきた「バックワード・ルッキング」モデル、すなわち現在の経済変数がラグ付き経済変数と現在のショックに依存するようなモデルの方が、より優れた説明力を有する可能性があるということであり、このような知見はL. Ball (1999) から得られたものである。</p> <p>ほかにもう一つ、上記の二つの金融政策ルールは、一見まったく異なったものに思われるが、ときによってはそれほど異ならず、必ずしも別のものとしてとらえる必要はないということである。ただしそのためには、ベース・マネーの流動性と利子率の関係が安定したものでなければならぬが、このような点に吟味を加えているのがW. A. Bazzak (2003) などである。ただし彼が用いている修正マッカラム・ルールについては、より立ち入った検討が必要であろう。</p> <p>なおこのほかにも、これらの金融政策が利子率の期間構造に及ぼす影響なども論じられているが、今回は直接の関連はないので、その領域に立ち入った研究はしていない。</p>	